

コラム8 地震研究所の創設

1923（大正12）年関東大地震による大規模災害は、地震という現象を科学的に追求するとともに、地震防災に関わる研究を積極的に進めることの重要性を、多くの識者に認識させるものであった。そのため、1891（明治24）年の濃尾地震災害を契機に設立された「震災予防調査会」に代わる新しい研究機関の創設が、緊急の課題と考えられるに至った。

そのような流れのなかで、当時、東京帝国大学造船学科の教授であった末廣恭二と、同物理学科の教授であった寺田寅彦は、互いに協力して、新しい地震研究所の計画を立案していた。それは、地震学の基礎的な研究と、地震防災の研究とに重点を置いたもので、全国からその道の権威を集め、さらには若い研究者を育成しようというものであった。

この案は、当時貴族院議員であり、理化学研究所所長でもあった大河内正敏の推挙によって、1924（大正13）年の帝国議会で承認され、翌1925（大正14）年11月14日、地震研究所設立の官制が施行されて、安田講堂の裏に建物が造られることになった。

建物は、1927（昭和2）年3月に着工、翌1928（昭和3）年3月に竣工を迎えた。地上2階、地下2階の鉄骨鉄筋コンクリート造りで、延べ坪1,450㎡と小さいながらも頑丈な建物であった。初代の地震研究所所長には末廣恭二が就任した。

地震研究所は、発足当初は文部省直轄の研究所として創設されたもので、たまたま東京帝大の本郷キャンパスに付置されているという位置づけであった。だから事務用の封筒には、「東京帝国大学構内地震研究所」と印刷されていたという。現在のように、東京大学付属の研究所となったのは戦後のことである。

地震研究所の設立によって、震災予防調査会は発展的解消を遂げた。こうして発足した地震研究所の研究分野は、地震学、火山学、地質学、土木工学、建築学など多岐にわたり、研究室の主任には、それぞれの分野での権威者を招き、若い助手たちを新たに採用しては、最先端の研究にあたらせた。

当時採用された助手のなかには、坪井忠二、高橋龍太郎、津屋弘達、多田文男など、後年それぞれの研究分野での権威者となり、指導的役割を果たした人びとがいる。

安田講堂の裏に建設された研究所の建物は、規模の拡大に伴い手狭となったため、1963（昭和38）年、本郷弥生地区に移転し、現在に至っている。

関東大地震を契機に創設されて以来80年あまり、東京大学地震研究所は、地震研究のみならず、火山噴火の研究、地球内部の研究、さらには地震防災、耐震技術、津波防災、火山防災などの面で、日本の研究中枢としての役割を果たしている。